

当の読書用には少しく不向であったし、机が大形であったのは、読書よりも絵本を見たり、挿絵を引写しするのに便利に設計されていたのだろう。

本の挿図の切取りは昔からあったようで、すべての図版にカラ印を押ししたりして、あれこれと頭をなやませた。しかしあの頃は、本を丸々持って行かれると云う事は少かった。今は普通の大学図書館では、一年に何%かの本が盗まれるのを計算に入れて運営するのが通例だと云う様な事を耳にすると、日本の大学生も地に落ちたものだ、なげかわしく思われる。

戦後の図書館の運営にはアメリカのシステムが導入されて、いろいろ進歩している様であるが、近頃の図書館は何となく御役所然としている。昔の文庫は素人のお店の様なもので、間の抜けた物であったが、それなりの暖かさがあって、先生、図書館員、学生の社交の場でもあった様な気がする。組織は進歩するのだろうか、退歩するのだろうか。

〔図書館ジャーナル〕第六号。昭和四十九年、東京芸術大学附属図書館。数字は漢数字に統一した。〕

⑫ 東京美術学校改革

昭和十九年五月、文部省は突如本校改革を断行し、校長および教官の更送を行なった。これは明治三十一年の所謂美校騒動以来の大きな変革であった。その経緯を記す。

改革前史

一、美術振興調査会の答申

文部省が改革を断行する契機となったのは、美術振興調査会の答申であると考えられる。既に述べたように、文部省は年を経るにつれて沈滞しつつあった帝国美術院を真に権威ある機関に立て直すため、昭和十年に在野の有力作家を加えて新たな組織を作った。それは松田文相による突然の改革であったため美術界に大きな動揺をもたらし、翌十一年の平尾改組は問題をさらに複雑にしたが、同十二年に至り、帝国芸術院設置と文部省美術展覧会（新文展）開設によって一応の收拾がついた。この大騒動に懲りた文部省は、以後美術行政の長老たちを顧問に置き、常に協議しつつ事を進めることにした。長老といえは先ず正木直彦だが、その正木の日記に顧問の会が設けられる経緯の一端が記されている。

〔昭和十二年六月十五日〕……午後五時伊東（延吉）文部次官來訪ありて昨日の夕刊に藝術院の事曝露され迷惑致居る 併し其方面に進み居ることなれば御諒解願ひたし 尚文部省の美術行政に付省内には此方面に堪能なるものなければ顧問として長老の人々 清水澄 松浦鎮次郎 貴下 岡部長景子 細川護立侯の五氏を煩わしたしとおもふ 御承引を乞ふといふ

長老の一人、細川護立についても『美術年鑑』（昭和十四年版。美術年鑑社）に

〔同年同月十九日〕細川護立侯は伊東文部次官に招かれて文部省

にて約一時間に亘り美術行政顧問機関に就いて懇談した。

と記されている。正木、細川との交渉にあたったのは伊東文部次官であるが、それは正式な顧問依頼の交渉であったためだろう。当時、省内でこの種の美術行政事務を担当していたのは専門学務局学芸課であり、課長は本田弘人であった。本田は帝国芸術院設置の準備を担当し、設置後は院の主事を兼任しており、いわば省内における美術行政のエキスパートで、この顧問の会を作る際にも実際は彼が奔走したことが正木の日記などからも窺える。

かくて顧問の会（顧問および専門学務局長、学芸課長）が成立し、同会は新文展の方針の決定、買い上げ作品の選定、紀元二千六百年奉祝美術展覧会開催計画決定等、美術行政に威力を発揮するようになった。新文展が破綻もなく開催されたのもそれによるところが大きいと言えよう。そのため文部省は同会を正式な制度として確立することにし、その結果生まれたのが美術振興調査会であった。正木の日記には

〔昭和十四年五月二十七日〕……午前中 文部省 学芸課長 本多〔本田弘人〕氏 來訪 美術調査會組織の事に付き 試案を示して 余の意見を 問ひたり……

と記されている。正木も当然委員に内定していただろう。しかし、彼は調査会設置の約一カ月前に他界した。

昭和十五年四月十二日、勅令によって美術振興調査会官制が公布

され、同時に委員が任命された。同会は文部大臣の諮問機関として位置づけられ、美術行政機構の整備統一、美術の振興、美術教育の刷新等の根本方針確立に向けて重要事項を調査、審議することとなった。メンバーは次のとおりである。

会長 侯爵 細川 護立
委員 子爵 岡部長景

文部次官 赤間 信義（七月二十九日辞任）

同 帝室博物館総長 菊池 豊三郎（八月五日任命）

同 前帝室博物館総長 渡部 信

同 東京美術学校長 杉 栄三郎

同 東京帝国大学教授 芝田 徹心（五月二十九日辞任）

同 東京帝国大学教授 澤田 源一（六月八日任命）

同 同 大西 克礼

同 同 助教授 藤懸 静也

同 京都帝国大学教授 児島 喜久雄

同 京都帝国大学教授 植田 寿藏

同 文部省宗教局長 田中 豊藏

同 衆議院議員 松尾 長造（四月十三日辞任）

同 阿原 謙藏（四月十六日任命）

同 大川 喜六

同 川崎 克

同 帝国芸術院長 清水 澄

同 美術研究所長 矢代 幸雄

同 文部省専門学務局長 永井 浩（四月十六日任命）

幹事 文部書記官 本田 弘人

同 青戸 精一（八月五日任命）

調査会は四月十七日に第一回総会を開き、松浦文部大臣の挨拶のあと、各委員より美術行政に関する文部省の機構改革、充分なる予算の必要、美術行政に関する諸外国の制度調査、美術保存問題における民間との協力、美術教育の問題、現代美術館設立の要望などの提案がなされた。次いで五月三十一日の第二回総会では澤田、川崎、藤懸、児島、永井、矢代をメンバーとする小委員会ができ、種々の問題はここで討議することになり、小委員会は度々会合を開いて協議してその結果を七月十五日の第三回総会で中間報告した。十一月二十八日の第四回総会では橋田文部大臣の「美術振興上適切な具体的方策」という諮問に対して調査会は、東亜新秩序建設の時代的要求に即応するための美術上の方策三項目を答申した。

一、美術行政の統合

(1) 文部省に美術に関する統一的部局（例へば美術局）を設置し、美術の保存、奨励、美術教育、美術に関する調査研究等を一元的に統合管理せしむること。

(2) 美術に関する調査研究機関を整備拡充すること。

二、美術教育の刷新

(1) 我国固有の美術を通じ国民精神を醇化し国民文化の向上を期するため国民学校、中等学校等の学校教育を通じ美術教育の刷新に努むること。

(2) 古来の伝統に立脚し新時代に適應する新文化を創造すべき専門家、指導者の育成に努むること。

三、美術施設の拡充

(1) 国立美術館を設立して日本美術の精華を内外に知らしめ、国民教養に資すること。

(2) 古美術保存施設整備を図り、国民文化の伝統を顕揚すること。

(3) 展覧会其の他の美術奨励施設の刷新振興を図り、新文化の建設に寄与すること。

なお、これより先、十月十九日の閣議で政府の各種委員会の整理が決定したことにより、調査会も廃止されることになったため、細川会長は右の答申とともに調査会に代わるべき権威ある機関の設置を求める決議を文部大臣に提出し、翌十六年四月に調査会は廃止された。

さて、答申のなかで直接本校に関わりのあるのは勿論「美術教育の刷新」の項目である。答申内容は抽象的だが、これは美術教育の中核にある本校の教育刷新が問われたことを意味する。そして、この答申によって、本校の改革ということが文部省の懸案となったのであり、やがて本校改革の当事者となる永井浩、本田弘人、間接的だが重要な役割を果たす細川護立、岡部長景、児島喜久雄らはすでにこの時点から改革問題に深く係わることになったのであった。

このうち、本田弘人は前に述べたように美術行政の実務を担当してきた官僚。熊本県出身で、大正十一年に東京帝大法学部を、同十四年に京大文学部を卒業し、龍谷大講師、静岡高校教授を勤めた後昭和十一年十二月に文部省専門学務局学芸課長となり、同十二年一月帝国学士院、帝国芸術院、学術研究会の各主事を兼任。その後文

部省科学局総務課長となったが、美術行政方面の経歴を買われてか、十九年の本校改革に関与し、のちには熊本大学学長、学術会議総務長となっている。

侯爵細川護立は国宝保存会会長、皇室技芸員詮衡委員その他の要職を兼ねる美術行政の最高顧問であるとともに、横山大観および日本美術院の庇護者として知られた人だ。朦朧体の時代から大観、春草の作品を買集め、その愛好のほどは現在の永青文庫において窺い知れる。昭和十七年一月設立の財団法人岡倉天心偉績顕彰会（理事長は横山大観）の会長として天心顕彰にも一役買っている。

児島喜久雄は東京に生まれ、大正二年東京帝大文学部（哲学科、美学専攻）を卒業。同七年学習院教授となり、同十年から十五年にかけて欧州に留学し、帰国後東北帝大助教、次いで東京帝大助教となった。傍ら美術研究所嘱託、九州帝大講師、京城帝大講師をつとめ、美術批評家としても活躍。昭和十六年に東京帝大教授（西洋美術史）に就任して同二十三年まで在職している。彼は細川のブレーションと言われ、学究生活の上では矢代幸雄や上野直昭と近しかった。調査会において美術行政問題、とりわけ本校の問題を十分に論じることのできる人は彼をおいて外になかっただろう。調査会の答申にはこの児島や細川の考えが投影されたに違いなく、また、同会廃止後も彼らの意見は文部省側に対して少なからず影響を及ぼしたと考えられる。児島は本校改革後一時期講師を勤めている。

なお、本校改革と直接関係するものではないが、昭和十四年六月、文部省は日本諸学振興委員会に芸術学部を設けた。その主旨は「国体、日本精神の本義に基き芸術、芸術に関する諸学の内容、方

法並に教授の実際を研究討議して之が創造発展に資せんとす」というもので、芸術学会を開いて各種の研究発表を行うこととした。六月一日に十四年度委員に任命されたのは次の人々である。

文部省書記官	本田 弘人
東京帝国大学教授	斎藤 勇
同	藤懸 静也
同	大西 克礼
京都帝国大学教授	成瀬 清
東北帝国大学教授	阿部 次郎
九州帝国大学教授	矢崎 美盛
東京美術学校長	芝田 徹心
東京音楽学校長	乗松 嘉寿
美術研究所員	矢代 幸雄
	塩谷 温
	西脇 順三郎

このことは文部省が芸術分野に積極的姿勢を見せ始めたことを示している。

二、横山大観の意見書

美術振興調査会が答申を出して活動を停止したのに対して、その活動を補足するが如く美術行政、とりわけ本校改革問題に関する世論の喚起に乗り出したのは、昭和十二年第一回文化勳章を授与されて画壇の頂点に立った横山大観であった。答申が出た一カ月余り後の十六年一月元旦に、大観は橋田文部大臣をはじめ要路の人々、新

聞社、雑誌社に「日本美術新体制の提案」と題する意見書を配付して、新体制の樹立に適合する美術行政の根本方策の確立を訴えたが、方策の一つに本校改革を取り上げて次のように主張した。

三 美術教育の刷新

美術教育の適正は美術振興の根柢を爲すべき者なるに文部當局は多年に亙りて我邦唯一の官立最高の美術教育機關たる東京美術學校を校長の理想なき施設に一任してその適否の検討を爲さず帝國議會また貴重なる國帑の善用に就いて最近に至るまで之を問題とする者なかりしは是れ美術が一國文化の精髓にしてまた風教の作興に關するのみならず百般工藝の進歩に重大なる聯繫を有する者たるを理解せず或は之を閑事業となし或は門外漢の與り知るべからざる領域と見做す等恥づべき悲しむべき不認識を敢て爲したるに由るものにしてその怠慢は獨り學校當事者の罪たるのみならず爲政者もまたその責任の一半を負はざるべからざるなり。抑々東京美術學校設立の趣旨たるや民族性に基き日本美術の振興發展を圖るにあり。その目的達成の爲には東洋精神本來の高き理想を抱懷せる雄偉なる人物を養成し以て人格の原理たる志氣を發芽せしむるに最大の努力を致さざるべからず。然るに學校當事者がこの第一要素を苟且にせるは美術教育の本義に悖るものなり、而してその授業に於ては總て日本精神、東洋藝學を輕視し動もすれば形象の末技に没頭して低俗なる感覺表現の藝術を以て得たりとなす。その弊害の甚だしきこと私塾に過ぐるものあり。始め洋畫科の併置せらるるや之を以て日本美術進展の一助と爲すべかりしに

その本末を顛倒して今日の美術學校たらしめたり。近年校長の頻繁なる更迭を見たるが今猶舊態依然として何等刷新改善の實を擧げ得たるを聞かざるは洵に慨歎に堪へざるなり。美術界の改善は社會に於ける凡百の施設と關聯し不可分的に東京美術學校の教育方針の刷新を要望す、即ち當局者は國家の動向に即應し敢然内部の情弊を排除して速かに學制の刷新を勵行し以て最高美術教育機關たるの實を擧げられんことを至囑するものなり

それ新體制とは一億國民一體となり高度國防建設に膺る者なるが故に美術界に於て在來の放漫なる自由思想を嚴かに戒飭し各自が職分に於て日本精神の顯揚に力め奉公の誠を致さざるべからず。之に背反する逆行的思想乃至無用なる夾雜的作物は皇國の域外に放逐せらるべきなり。〔下略〕

〔『美之國』第十七卷第二号。昭和十六年二月〕

この主張は昭和七年和田英作校長就任の際、それを攻撃して彼が公表した意見書の趣旨と同じもので、今回は調査会の答申に觸発されて再度本校の改革を唱えたのであった。大観にとって本校は単に美術の最高教育機関というだけでなく、崇拜する岡倉天心の創立した學校であり、自分の母校であった。彼が本校に対して深い関心をもち、折りあらばこれを掌握したいとさえ思っていたことは既に述べたとおりであるが(565頁)、國を挙げて臨戦態勢に入らんとする昭和十六年という時代の空氣の中で、その思いはいやが上にも高まつたに違いない。

大観の意見書は「日本美術新体制」構築のための理論としては不

備であり、個人的意見に留まるものであって、美術界の反応は賛否両論さまざまであった。本校講師の彫刻家加藤顕彰は大観の意気盛んなることは賞すべしとしながらも、その主張は「本質をつかざる些末の論」であり、その美術教育に関する論は「真正なる思想に缺けている」とし、「私は今こそ岡倉天心が美術學校創設に至る事情に明らかに藝術の世界性と云ふことに熱き希求をこめてゐたかを見るべきであると思ふ。大観老にかゝる傳統の流れが希薄であることは洵に遺憾である。天心をたゞへて天心の精神を眞に高揚せしむることに缺けたる人の多き今日、せめて大観老にその精神を純粹に高揚せしめんとする思想があつて欲しい。」と批判している（『美之國』第十七卷第二号）。また、豊田豊は大観の攻撃の的となつてゐるのは

結城素明、川崎小虎、矢沢弦月、小泉勝爾、常岡文亀を指導陣とする本校日本画科であると見て、素明は大観と同列の巨匠であり、日本主義を以て立つ大日美術院の長老であつて、「當代畫壇に於ける最も鮮明なる國學的日本主義を彩管化し國民情操涵養の藝術國土として行動」してゐるのだから、大観の攻撃は間違つてゐると反論している（『美術日本』第七卷第一号。昭和十六年一月）。しかし、いづれにせよ大観の意見書は問題含みの本校の現状を議論の俎上に載せるに十分の役割を果たしたのであつた。

大観は日中戦争が始まるや率先して彩管報國に身を捧げ、昭和十五年には自作「山十題」「海十題」の計二十点の売上げ五十万円を陸・海軍に献納。陸軍省はそれによって重爆撃機、戦闘機各一機を作り、大観号と命名し、海軍省もまた陸上攻撃機、艦上攻撃機各一機を作つてやはり大観号と命名したが、それは大観の名をあまねく

國民に知らしめた。同十七年には岡倉天心偉績顕彰會を設立して當時の國策に沿つたかたちで天心顕彰の機運を盛り上げ、次いで十八年五月に「大東亞戦争」に際して全美術団体合同の日本美術報國會が結成されるや會長に就任した。ときに七十五歳。美術界の頂点に立つた彼の意見というものは自ずと大きな影響力を持つに至つた。因みにこの日本美術報國會の成立も本校改革の一つの要因と見られなくはない。なぜなら、次のような報道がなされてゐるからである。

日本美術報國會の結成

大政翼賛會では文部省、情報局と協力して美術を戦力化し決戦下にふさはしい文化を創造しようと全日本の美術作家を一九とする社団法人日本美術報國會の結成を急いでゐたが黨派性を捨てて全作家が参加することになり十四日上野精養軒に藝術院會員と日本畫報國會、美術家聯盟、全日本彫塑家聯盟、工藝美術作家協會の代表者百餘名が參集、結成準備會を開き二十九日の天長の佳節に發會式を舉げることになつた。

日本美術報國會は一部（日本畫）二部（油繪）三部（彫塑）四部（工藝）の四部門に分れ、各部毎に常任幹事と普通幹事を十五名宛を置き是を統率する幹事長部會長を理事とし理事八名をもつて理事會を結成する、總裁、會長、副會長の他に事務局をおき事務局長の下に總務、審査、事業、資材の四課を設け、文學報國會の事務局と同様に美術活動を行ふが、美術報國會の誕生とともに現在無數に開かれる展覽會は整備され彫しい資材を浪費する文展

の機構改革 東京美術学校の再検討など色々の問題も豫想されて
 ゐる 又問題の會員資格は廣く作家を網羅して美術報國に協力さ
 せるといふ建前から展覽會一回以上入選者を准會員、三回以上入
 選者を正會員とするので會員は一萬以上に上るものを見られてゐ
 る。

〔新美〕第百八号、昭和十八年四月〕

報国会成立と同時に本校改革問題が浮上したということは注目す
 べきことである。この年の一月には『新美術』誌上で美術問題研究
 会による「美術教育問題の検討」が開始され、本校改革問題も人々
 の関心を引き始めた。こうした下地があつてしかも横山大観が報國
 会会長に就任したとあつては、本校の問題が大きくクローズアップ
 してくるのは当然の結果であつたとも言える。なお、大観は成立式
 の挨拶の中で、

近時歐羅巴文明に眩惑し自らの傳統と其優秀性を没却せんとす
 るの懼れさへ感得せし吾々は今日此時より西歐的形骸を蟬脱し眞
 に皇國日本の傳統を顯現する連城の壁たることを期さねばならぬ
 と存するのであります。

〔美術と趣味〕第七十九号〕

と言ひ、昭和七年の「美術教育の根本精神を論じて当面の問題に及
 ぶ」および同十六年の「日本美術新体制の提案」等において表明し
 た持論を更に強く主張した。

三、改革直前の職員

東京美術学校職員表

〔昭和十九年四月十五日現在〕〔謄写版〕

担任学科目	官等	待遇	官職	位階勲等	氏名
日本画実習	二等	七級	教授	正四、勲三	結城 貞松
建築実習、数学、 力学、建築構造	同	五級	同	從四、勲四	森井 健介
教授法、教授練 習、絵画実習	勲任 待遇	六級	同	從四、勲四	多賀谷健吉
道義	三等	四級	生徒主事 兼教授	從四、勲五	佐々木 卓
漆工実習、漆工 史、漆工製作法	同	七級	教授	同	六角注多良
油画実習	同	同	同	正五、勲四	小林 万吾
鑄金実習	同	五級	同	同	津田 信夫
彫金実習、金工 製作法	同	七級	同	同	清水 亀藏
塑造実習	同	八級	同	從四、勲五	朝倉 文夫
同	同	同	同	同	北村 西望
図案実習	同	九級	同	正五	和田 三造
鍛金実習、金工 史	同	七級	同	正五、勲四	石田 英一
油画実習	同	九級	同	從五、勲五	田辺 至
西洋美術史、西 洋絵画史、英語	同	七級	同	同	森田亀之助
日本画実習	同	九級	同	同	小泉 勝爾
彫金実習、金工 史	同	八級	同	從五、勲六	海野 清

塑造実習	年	七二〇円	同	加藤 鬼頭太
仏語、西洋工芸史	月	八五円	同	新 規矩男
書道	年	六〇〇円	同	石橋 啓十郎
東洋文学	無給		同	原田 謹次郎
セメント美術実習	月	一〇〇円	同	矢崎 好幸
施工法、建築材料	年	六〇〇円	同	中村 伝治
建築実習	不定額		同	吉田 五十八
国語	同		同	遠藤 佐市郎
漢文	同		同	秦 慧玉
工芸化学(漆工)	月	二五円	同	滝川 長七
美術史	不定額		同	矢代 幸雄
書道	同		同	尾上 八郎
教育学	同		同	上村 福幸
倫理学	同		同	高階 順治
図学	同		同	鈴木 清
絵画実習(油画)	同		同	小磯 良平
同(同)	同		同	寺内 万治郎
体操、教練	月	一〇〇円	同(応召)	槻尾 宗一
図案実習	月	七五円	同	小池 岩太郎
体操、教練	月	一〇〇円	同(応召)	鬼沢 美濃作
鍛金実習	月	七〇円	同	品田 慎一
体操、教練	月	一一〇円	同	大島 住之助

備考 「不定額」ハ担任授業終了ノ際概ネ一時間五円以内ノ標準ヲ以

テ計算シ給与スルモノナリ

「無給」ハ年末賞与ヲ給スルノミニナリ

〔補遺として左記の書き込みがある。〕

友田 鎮三	書記兼主事補	高橋 吉雄	嘱託	本多 利時
松田 和三	書記	大友 春松	同	橋本 統陽
関 秀光	同	鈴木鉄太郎	同	大江 雄五
滝沢 俊郎	同	瀬谷 義広	同	川合 清
	主事補	寺田 春一	同	筒崎 謙齋
	書記	浦野 雙観	同	柳 俊夫
			雇	佐々木 一郎

四、本校内の改革運動

昭和十年代の本校は、その指導体制においてさまざまな問題が生じ始めていた。日本画科では川合玉堂の辞表提出の頃から外部の批判が高まり、玉堂辞職後(十三年)結城素明を中心とする官展作家の指導陣ができてからも、指導体制の不備を指摘する声は止まなかった。また、油画科でも、和田英作の辞職(十一年)、岡田三郎助の死去(十四年)、藤島武二の病气などによってかつての安定が崩れ、官展中堅作家を以て指導陣を補充したものの、弱体化の印象は免れなかった。教官の補充は専ら官展系作家からなされたが、その慣例は帝国芸術院改組により官展自体の改革がなされた以上、もはや存続困難の状態となった。にも拘らず旧官展の大御所である教官

の死去のあとをその後継者の立場にある旧官展作家を以て埋めることが続いていたことに問題があったのであるが、文部官僚の芝田徹心校長にも澤田源一校長にもそれを解決する力はなかった。かくて美術振興調査会の答申に次いで大観の意見書が出て世の関心が高まったなかで、十八年三月に洋画界の大御所にして多くの信奉者を持つ藤島武二が死去。これより本校に対して公然と批判が行われるようになった。例えば、当時朝日新聞の美術記者として名を馳せていた遠山孝は『新美術』第二十三号(同年六月)所載「経験が生んだ私見」において、「大東亞戰」完遂のために美術家はもつと時局を認識し、技術錬磨とともに精神錬磨にも重きを置いた「新しい時代の師匠道」を立てて若者の指導に当たらねばならないとした上で、特に本校の現状について「従軍作家の勝れた人をどし／＼採用して、氣魄なるものを打ち込むことも大切であらうし、また花鳥畫ならば第一流の人、魂の入った作品をつくる第一流人に來て貰つては生徒を教へる。それが美術界でも餘りに重きをなさぬ作家群を教授に集めたり、或は文部省でもさして重きをなさぬ行政官あたりを校長にしてゐるやうでは、いつまでも美術學校はよくはならない。次代を擔ふ生徒は生れては來ない。」と述べている。

本校批判が高まるなかで、本校の若手教官の一部に内密の學校改革運動が起こつたのは昭和十六年のことであつた。当事者の山崎覺太郎や伊原宇三郎らの談話(後出)によれば、そのメンバーは彼らと高村豊周、村田良策、正木篤三、および正木の友人の文部省教官佐藤得二で、彼らは人事刷新について熱心に議論を重ねた。その結果、先づ澤田校長を排斥して新しい校長を選ぶことになり、正木

ないし和田新(ともに本校教員にして美術研究所職員)の推薦によつて上野直昭が選出された。そこで佐藤が大阪の上野のもとへ連絡に行き、改革問題は全て上野が上京してから相談の上決定するという条件つきで承諾を得るに至つた。彼らの計画は佐藤を介して文相も認めており、特に佐藤は文相から改革の全権を委ねられていたのであるが、極秘裡に進めていた計画が細川護立に漏れ、細川が強権を以てストップをかけたため、改革運動は阻止されてしまつたという。

このように、若手教官のなかには積極的に改革を進めようとする者もあつたが、彼らに人事刷新についてどれだけ具体策が立てられたか、或いはそれを実行できる力があつたかは疑わしい。それぞれの立場や思惑、しがらみは恐らく根本的改革を阻んだことだろう。彼らの運動は、むしろ本校内部にすら改革運動が起きているという事実を以て、文部省に全面的改革断行の一つの根拠を与える結果になつたと言えよう。改革断行の際、彼らのうち村田は本校に留まり、佐藤は教授の地位にいたが、高村、山崎および伊原は誠首された。なお、正木は十八年三月に辭職している。

次に山崎と伊原の改革に関する回想記を『東京美術學校の歴史』より転載(数字は漢数字に統一)する。

山崎覺太郎氏

(大正十三年漆工科卒業、大正十四年〜昭和十九年同科教官)

(一)美校内部からの改革運動について

工芸科鑄造部主任の津田信夫教授（明治三十三年鑄金科卒業、明治三十四年（昭和十九年教官）は和田英作校長の下で会計課長という役につき、会計の実権を握っているとにも、諸制度に關して校長に具申するなど、教頭的地位にあって、工芸科の実力者と目されていた。津田教授の下には工芸各部の若手教官が次第に集まるようになり、工芸科の中に津田を中心とするリベラリスト集団ができ、教官会議等ではそのメンバーが活発に発言するのが常であった。津田の自宅はリベラリズムの繪本家といった観があるが、そこに私や高村豊周、内藤春治、廣川松五郎を始め、工芸科以外の教官や事務員までも集まるようになり、学校に対する不満を言ったりした。

このようなことが長らく続くうちに、有志は改革、特に校長排斥のための具体的行動に移っていった。戦時下灯火管制の下で、所を変えながら私や高村、伊原宇三郎、正木篤三、村田良策などが策謀を練ったのである。一同は美校卒業生の中から校長たるにふさわしい人格者を選ぶべく検討していたが、その会合に正木篤三と親しい文部省教学官佐藤得二も時々参加していた。

当時美校内では各科内部において教官の対立感情が激しく、しまいには小使いまでも二派に分かれていると噂される状態であった。その源は正木校長が保身上の観点から科の運営を一教官に任せず、主任と理事を置いて故意に対立させる方針をとったことにあるといわれるが、弊害は後世にまで及んだのである。このような状態にあって、津田を中心とするリベラリスト集団は特異な存在であった。そこには津田と親しい日本画科主任結城素明教授も

関係していた。我々の積極的な行動は学内の固陋派の反感を買い、固陋派の中に文部当局と通じる者があったことも文部省が美校改革をおこなうに至った一端緒であったと思われる。

(一) 文部省による改革について

内部から校長排斥等の改革運動が高まりつつあった時、全く突然に文部省が美校改革に乗り出したのである。恐らく我々に接近していた佐藤得二などが導火線となったのであろう。ある日永井校長事務取扱は大部分の教官を集めて就任の挨拶をし、文部省では美校改革の意志があるから一応全員辞表を出してもらいたいということと言った。威圧的な態度で、具体的なことは何一つ言わなかった。その後教授、助教授というように分けて、助手に至るまで全員を個別に呼び、辞表を出させた。私は呼び出されて永井、佐藤両氏の前で白紙に捺印しただけの辞表を提出させられたが、その時も具体的理由について何一つ説明されなかった。当局では教官一人一人について処置を決めていたらしく、助教授は教授に昇格させた上で退職させるとか、私についていえば恩給の期限まで休職とした上で退職させるとかの措置がとられた。

六角紫水（改革の実施を前もって知っていたらしい）は津田を中心とする勢力を排斥できると安心して安心してか、朝鮮総督府囑託として出張していた。楽浪漆器の研究をしていたのである。私の後かたづけのため一週間ほど学校へ行っていた時など、その話しぶりから自分は退職させられないと信じこんでいたようだったが、予想に反して退職させられてしまったのである。

(二) 改革の原因について

文部省による改革の目的は、我々内部の改革陰謀組を排斥しようということではなく、別のところにあった。

先ず第一に美校では教官も生徒も軍事教官に対して反感をもっていたという問題があった。戦時下とはいえ、軍刀をさげてやって来る教練教官は嫌われ、当時はどの学校も同様だったろうが、軍人はずぼらな学生は退学させてしまおうという非常に厳格な態度で臨み、何かと干渉したので、生徒達は強い反感を抱き、それを聞く教官達も快く思わなかったのである。その頃の美術界に対する軍部の干渉には甚しいものがあり、よく展覧会場へやって来ては無理なことをいった。戦争末期になると全国各地に高射砲が置かれ、府美術館の前にも置かれ、その兵隊は美術館の一室を占領して自炊をしていた。ある時我々が帝展の審査をしていると、隣の部屋で昼間から酒を飲み卑猥な唄をうたったりして大変騒がしく、審査長の言葉も聞こえにくらいになった。そこで私が抗議を申し込んだところ、一時静かになったが、審査が済んだ頃になって軍曹がやって来て、刀の柄に手をかけて「たたっ切ってやる」と嚇した。沼田一雅がようやくのことで宥め、また後で少尉が部下の非礼を陳謝したので事件とならず済んだが、こういう干渉は常にあったのである。そのために皆軍部に対して強い反感をもち、学校内においても配属軍人に反抗し、我々リベラリストが教練教官にはっきり異議を唱えたこともあった。

もう一つの問題は美校の伝統と関係あることである。日本画科では橋本雅邦、川端玉章、小堀軯音らによる日本画の伝統が続いている中で、若くして教授に抜擢されたのは結城素明であった。

素明の次に松岡映丘（明治四十一年〜昭和十年教官）がおり、両者は互いに対立していた。映丘は若くして病没（昭和十三年三月）し、また川合玉堂（大正四年〜昭和十三年教官）も退いた後は、日本画科は素明の天下になろうとしていた。素明は留学を終えて帰国するや帝展その他で新しい画風を次々と展開してゆき、若い者達の渴仰の的となった。ところがそれは美校日本画の伝統を破壊して教育に西洋模倣的なものを導入するものであると非難する日本画旧派（大観ら）の攻撃を受けた。旧派の不満はそのような画風に対するものだけでなく、美術界のシステムに対しても強いものがあつた。つまり美術教官はよい生徒を生むことが能力評価の基準であるが、それは教え子が官展に入選することによって示される。教官は官展審査等美術行政に寄与しながら教え子を作家として活躍させる道を作り、優秀なものを自分の後継者として引き入れてゆく。このような循環運動（環）が繰り返されていたのであるが、この循環運動（環）には日本美術院の大観一派が入り込む余地はないのである。それは大観らの最も不満とするところであつた。かれらは美校の空気を入れかえるために教官を交代させることを文部省に具申したといわれるが、その背後には日本美術院のパトロンとして美術界に隠然たる勢力をもち、また貴族院議員として文部省にも関係をもっていた細川護立がいたことも念頭におくべきである。改革によって結城素明は退職させられ、非常に憤慨したが、現在日本画界の大御所となっているのは東山魁夷、橋本明治、杉山寧ら皆素明の門下なのである。

以上の問題の外に更に工芸科特有の問題があつた。既述のとおり

り工芸科には津田を中心とする勢力と固陋派との対立があり、固陋派の中に文部省と通じる者がいたのであるが、かれらの不満の一つに工芸技術講習所の設置ということがあった。津田信夫や私がかかり強引に設置させたため反感を招き、その結果我々を排斥しようとする動きが生じたのであろう。

以上のような諸問題に加えて、内部から改革運動が始まろうとしていたことなどが、文部省に改革を断行する機を与えたのであろうと思われる。

伊原宇三郎氏

(大正十四年西洋画科卒業、昭和七年、昭和十九年教官)

(一)美校に対する批判について

美校は美術の基礎も標準も何もないところへ作られたのであるが、創世期を経て本当に重きをなすに至ったのは正木校長の時である。私の在学中の頃の美校の権威というものは今では考えられぬほどのもので、日本の最高峰をかたちづくっていた。その時代には美校に対する批判はどこからも起こっていない。和田校長の時代になってそろそろ批判の声が出てきたのは正木前校長が長い間巨大な偶像として光っていたために、それと比較されたことと、和田校長が美術界に敵も味方も持っていたことなどの理由によるのである。しかし大体は順調にゆき、その後は岡田校長となり、その次から美術に関しては全く素人の校長が登場した。芝田徹心校長は文部省図書局長をやっていたお坊さんで、美術については全く素人であるが話のわかる人物であった。ところが沢田源

一校長の時代になると、美校に対する美術界や世間一般の悪口が最高潮に達したのである。

この美校の悪評を分析してみると、半分は事実であり、学校自身に責任があるといえる。それは美校の宿弊ともいべきもので、大家の何人かが美校の看板となつてはいるが、その教育方法は古くてマンネリズムに陥っており、しかも若手を育てようとならないから、若手にしっかりした人がいないという状態である。大家では例えば藤島武二先生などが光っていても、先生自身学校をよくしようなどという気はない。美校の運営をやっている人々も皆心服したい人ばかりである。そのため創世期のような潑刺とした空気がなくて、私など内部の人間としても肯定せざるをえないような弊害が存在していたのである。

しかし後の半分は言うべくして言っている悪口であった。その源泉は細川護立を中心にした細川閥であり、中でも児島喜久雄(昭和十九年、昭和二十三年西洋美術史教官、同二十五年没、六十三歳)は事あるごとに美校そのものを非難したのである。細川の下には主に日本美術院(古径、軼彦)、国画会(梅原)、一水会(安井)関係のいろいろな画家が集まっており、細川閥で美校を乗っ取るうと考えていた。結果的にはそのようになったのであるが、この気運を作り、援護射撃をやったのが児島で、児島の美校攻撃は改革の四、五年前から始まったのである。それはひどい悪口であった。

(二)学内からの改革運動について

私は昭和七年に教官に採用されたのであるが、当時藤島武二教

授と岡田三郎助教の対立には激しいものがあり、藤島先生が私を推し、岡田先生が中村研一を推し、めんどうな問題に発展して正木校長を悩ませた。このように若手一人を入れることさえ困難な問題を引き起こす状態であった。

その頃美校の若手教官で私と親しかったのは正木篤三と和田新であった。正木篤三（正木直彦の三男）は美術研究所に籍を置く東大出の美術史家で、美校では講師（昭和七年〜昭和十八年、東洋文学、東洋美術史、文庫係、昭和二十五年十月二十五日没）であったが、かれは父親の正木校長が退官した後美校に対する批判が高まり、素人の校長達が正木校長のつくった美校の権威を踏みにじっている状態をみて憤懣を抱いていた。和田（青山）新は和田英作校長の養子であり、やはり美術研究所に籍を置き、矢代幸雄の片腕として活躍し、美術家連盟の事務局長を二十年位勤めた。正木は私より年下であるが、将来を期待される傑物であった。かれの親友に佐藤得二がいたが、佐藤は京大瀧川事件（昭和八年五月）の時に手腕を振って思うとおりに解決した人で、その事件は文部省のヒットといわれたものである。成功して意気揚々たる教学官佐藤に、美校の改革を示唆したのは正木篤三である。これを引き受けた佐藤は美校改革の委任を文相に願ひ出で、全権を委ねられるや勇躍して改革へと乗り出した。しかし美校は特殊な学校であり、佐藤も正木も実技方面の事情に暗いので私に相談したのである。私は文部省から許可が出ている以上やりがいもあり、また必要性も感じていたので協力することにし、他の協力者の人選を始めた。若手助教陣に適当な人が少なく、特に日本画

科や彫刻科は皆無といってよく、若手はいても主任教官がアゴで使えるような者ばかりであった。工芸の方には高村豊周と山崎覚太郎とがおり、学科教官の中には恐らく正木が推したのであろうが、美学講師の村田良策がいた。正木、佐藤、伊原、高村、山崎、村田という六人の改革メンバーが決まったのは昭和十六年のことである。当時の美校にはこれだけしか情熱のある若手がいなかったのである。そして一年半か二年の間、メンバーの自宅等に集まって七〜八回の相談を重ねたが、なかなか具体的名案が出なかった。

会合では主に人事の刷新に論議が集中したが、これは非常にむつかしい問題であった。私などには日本には作家はいても教育をやる者がいないから、理想的な美術学校はできないと思っていた。作家ばかり集めてもしかたがないのである。フランスでは美術教育の専門家がうらやましい位に沢山いて教育も充実しているが、日本ではそれがなく、しかも音楽教育のように西洋人を迎えるということも出来ない。人選が困難な理由はもう一つある。それは黒田、和田、岡田、藤島までは、技術のイロハからたつきこんでいるので、ある程度の教育力は自然に身につけているが、その後の作家はトレーニングの期間が非常に短く、教育力も具えていないため、適任者が見いだせないということであった。一応はやや教育力があると思われる安井曾太郎や梅原龍三郎、小磯良平などをあげてみたが、それは後に回して先ず校長を決めようということになった。これも困難を極めたが、正木が上野直昭を推薦した。後でできたところでは、実際は上野を推したのは和田新であった。

という。そこで佐藤得二は大阪の上野のもとへ連絡にゆき、改革の問題はすべて上野が上京してから相談の上決定するという条件つきで承諾を得た。

(三)外部からの圧迫について

以上のことは極秘のうちに進められ、上野新校長選出の件も文部省の内諾を得たのであるが、どうしたことか文部省が改革に乗り出したということが外部にもれた。細川護立はこれに大変驚いて、直ちに改革にストップをかけたのである。この頃の細川は文部省や宮内省と関係をもち、強い権力をもっていたが、恐らく文部省の背後から宮内省の力が働いて我々の改革運動が阻止されたのである。細川は自ら校長になろうとする意志があり、そのことを光風会の伊藤悌三に話したことがあるという。しかし上野に決定していたので、どうすることもできなかったのである。

昭和十九年の春、旧職員のだしが退職させられ、細川の思うとおり日本美術院、国画会、一水会系の作家が教官となったが、中には学校に残って再び教官となった者もあり、皆から諺られたりした。以上のように改革運動というよりお家騒動に近い結末で、細川の校長になろうとする希望も叶わず、美校内部からの意見も入れられず、上野校長も約束が違つて何一つ相談されぬまま新しい体制が出来上がったわけである。新しい教官の中に果たして十分な教育力のある者がいたかどうかは疑問である。安井にしろ梅原にしろ、それ程教育熱心ではなく、しばらく辛抱してやめてしまった。教官はともかく気の毒なのは生徒の方で、騒動以来作家らしい作家が出ていない。石井鶴三は神がかり的で、林武な

ども同様であり、美校というのは相変わらず看板を並べることしかせず、内容的にはなっていない教育をしているのである。そこに日本美術界の根の浅さということが示されているわけだが、私などフランスから教育力のある作家をどしどし迎えて内容豊かな教育をおこなうべきだと考えている。

退官した教官の中には非常に憤慨した者もあった。殊に高村豊周などは大人しい人であるにもかかわらず、自分らを利用しながら裏切った佐藤得二を激烈に非難した。私自身は作家生活に没頭できるからむしろ退官を喜んだ位であったが、しかし文部省のあるような改革のしかたは決して賛成できるものではないと思っている。

改革準備

昭和十九年春、世は戦時体制一色に塗りつぶされ、美術界も独自の活動を停止し、本校も学徒出陣、勤労動員のため登校生徒の数は極端に減り、本来の機能を失った。前年の四月二十三日には、既述の美術振興調査会の委員であった岡部長景が文部大臣に就任。この岡部のもとで文部省は本校改革を決定し、準備に着手した。ここで最も活躍したのは佐藤得二である。佐藤は一高、次いで東京帝大哲学科を卒業し、京城帝大予科教授、一高教授・生徒主事をへて文部省教学官となった。昭和十八年十一月、文部省の機構改革により教育学局が置かれ、そのなかに文化課が設けられて美術行政を取り扱うことになった結果、佐藤は必然的にそれに関与することになったのだが、前に述べたように本校内の改革運動と関わりがあったとすれ

ば、自ら進んで関与したと考えられる。彼は戦後長い闘病生活のあと「女のいくさ」で直木賞を受賞して世間をあっと言わせた人で、教官時代にもなかなかユニークな存在であったらしい（今日出海著「佐藤得二における人間の研究——新直木賞作家の横顔——」『文藝春秋』四一の九、昭和三十八年九月）。東大哲学科、京城帝大を通じて安倍能成や上野直昭らとも繋がりがあった。

本校改革案はこの佐藤が中心になって纏めたと考えられるが、幸いにも案が検討されていた時期の資料が本学に僅かながら残されている。その一つは昭和十九年四月十五日現在の本校職員一覧表（わら半紙に謄写版印刷）を土台にして、一人一人につき鉛筆で辞職、留任の別を○×その他の記号で示し、必要に応じてその人の略歴、人物評、技量、勤務状況、辞職した場合の生活状態などを書き込んだ生々しい資料だが、特に注目すべきことは、最初の部分に青鉛筆で「協議員会、大観、六角、玉堂、香取」と明記されていることである。大観は横山大観、六角は本校教授六角紫水、玉堂は川合玉堂、香取は前年本校を辞職した香取秀真で、いずれも帝国芸術院会員である。これによって人事改革のための協議員会が非公式に設けられ、本校にゆかりの深い大家四名が協議員となり、文部省の担当者とともに人選にあたったことがわかる。資料の末尾には平櫛田中、安田靱彦、小林古径、安井曾太郎、梅原龍三郎、高村光太郎、石井鶴三の名が赤鉛筆で、清水亀蔵の名が青鉛筆で記され、名前の下にそれぞれに付すべき官等と俸給、その他（山崎覚太郎、高村豊周に対する非難など）が書き込まれている。この部分は改革後の主たる教授を列記したもので、これによって改革の際に高村光太郎が

任官の勧誘を受けた（但し辞退）という通説も裏付けられる。これが作成された段階では、教授については辞職か留任かの決定がほぼできた模様で、辞職の印を捺された教授の大半は実際に辞職を命ぜられた（広川松五郎のみは辞職の印が捺されたが留任）。六角紫水は山崎覚太郎の談話（前出）にもあるように、改革の際の行動について云々されているが、この時点で辞職の印が捺されているところを見ると、彼には辞職の決意があったことが考えられる。因みに彼は改革後その女婿の六角大塚を後継者として本校に任官させている。助教授、講師クラスについてはこの段階ではまだ決着がつかなかったらしく、種々錯綜した書き込みがなされている。

もう一つは次の新教官配置表（東京美術学校用箋にペン書き。官等、俸給は省く）である。

上野直昭			
(日) 安田靱彦	山本丘人	奥村土牛	
小林古径	田中青坪	村田泥牛	
		羽石弘志	
(油) 安井曾太郎	寺田		
梅原龍三郎	〔赤鉛筆で記入〕		
〔鉛筆で記入〕			
(中川一政)			
		(小磯良平)	
		寺内萬治郎	
(彫) 平櫛田中	菅原安男	伊藤 廉	
		曾宮一念	
		裕伊之助	
		久保 守	

石井鶴三 笹村良紀
〔鉛筆で記入〕
〔加藤頭正〕

工 顧問 清水亀蔵
富本憲吉

東洋工芸史 石沢正男
西洋工芸史 新規矩男

芸 (図) 広川松五郎 羽野禎三
(彫) 海野 清 山脇洋二

(実習) 小池岩太郎

(鍛) 石田英一 八田辰之助

(鍛金実習) 品田慎一

(鑄) 内藤春治 丸山義男
(漆) 松田権六 磯矢 陽

(工芸化学) 蒔田宗次
髹漆 澤口吾一

部 (工) 芸 化 〔学〕 漆工 滝川長七

(工芸技術講習所) (主事) (山脇洋二) 講 (師) 梶田 恵
中田満雄 谷内治橋
内藤四郎 嘱託 藤本能道

(建築) 岡田捷五郎 水谷武彦
金沢庸治

(西洋建築史) 大澤三之助
(東洋建築史) 関野 克
施工法 中村伝治
実習 吉田五十八

(師範) 松田義之 伊原宇三郎

〔不明〕 図学 鈴木 清
川合 清

寺内萬治郎 常岡文亀
関野金太郎 (入谷 昇)

(東洋文学) 原田謹次郎
(書道) 石橋敬十郎
(書道) 尾上八郎

(教務) 〔課〕 村田良策 西田正秋

〔赤鉛筆で記入〕 嘱託 山田

(生徒) 〔課〕 岡田捷五郎 主事補 寺田春一

小林太市郎 入谷 昇

小塚新一郎 (体操) 梶尾宗一

(文庫) 〔課〕 山下民蔵 下村英時 東山〔新吉〕

大友春松

瀨谷義広

浦野双観

鈴木鉄太郎

高橋

〔鉛筆で記入〕
〔教練〕 体操

(体操) 鬼澤美濃作
大島住之助

こちらは任免の検討が大分進んだ段階で作成されたものと思われる。しかし、なお改革前後を通じて本校に任官したことのない中川一政、曾宮一念、小林太市郎らの名が挙げられているところを見ると、決定はまだ先きであることを示している。上野直昭の日記に明らかのように、主な教授以外の任免は上野校長就任後に徐々に決定していったのである。なお、曾宮一念は『火の山巡礼』(大沢健一編。平成元年、木耳社)のなかで次のように語っている。

昭和十八年、美術学校の改革で安井〔曾太郎〕と梅原龍三郎が教授になった。二人とも昭和の洋画壇の大御所で、人気の点でも

第一人者なんだが、安井が僕にも美校に來いと誘うんだ。とんでもない話だね。

僕みたいにデッサンが下手、裸体も描けないなんて、美校に行ってもしょうがないもんね。多少、風景画は描けるか知らんか^{〔ぶち〕}。風景画なんて勝手に描けばいいんだよ。

僕らの学生時代なら、黒田先生のように教官室で葉巻でも吸ってればよかったけど、あとの教授は教えていたんじゃないの。

それでも安井先生の推薦だから、むげに断れなかった。ハイハイと言っておいたけどね。どう考えてみても、自分にとっても、学生にとっても、いいことじゃない。

ちょうど戦争が激しくなり、疎開の時期だった。それにかこつけて出席できないと、うまく辞退した。

そのとき梅原の推薦したのは伊藤廉なんだ。のちには校長（東京芸大美術学部長）になったから僕は冗談だったよ。僕が美校におれば年上だから、いまごろは校長だぞって。そうしたら曾宮さんの美術学校校長なんて、あんまり似合わんと笑いやがる。本当に行かなくてよかったと思うよ。

文部省はこうした改革準備を極秘裡に進めつつ、新規採用予定者と協議を行なった。その一証となる資料（原本は文部省起案用紙にペン書き）を掲げる。

昭和十九年五月十七日起案

専門教育局長 永井〔印〕

専門教育課長〔印〕 起案者 山下〔印〕

左案ニ依り證明書下附相成可然哉

案

證明書

神奈川県大磯町東小磯四〇三

帝国芸術院会員 安田新三郎

右者左記協議会へ召集セラレタル者ナルコトヲ證明ス

記

一、会議名 美術教育ニ関スル協議会

一、日時 昭和十九年五月十九日

一、場所 東京都

年 月 日 文部省

右の永井は永井浩、課長ははつきりしないが本田弘人か。山下は改革の際本校事務員となる山下民蔵、安田新三郎は言うまでもなく安田鞞彦である。

横川毅一郎はこの頃のことを題材とした一片の物語を「近代名匠譚（六三）横山大観（四〇）」（『萌春』一八九号、昭和四十五年七月）のなかに書いている。それによれば、十九年四月中旬のある日、大観は六角紫水の訪問を受け、本校改革計画を初めて聞かされた。紫水はその前日に文部省専門学務局^{〔教育〕}に呼び出され、岡部文相から校長を更迭して新たに「実技家ではなく、また文部省の官吏でもなく、人格識見の卓越した、民間の美術学者」から新校長を選ぶため大観に推薦を願いたかったので、美校同級のよしみから大観の意見を聴き取

って頂きたいと言われたのだ。そこで大観は、これは文部省というより「軍のお指図」らしいと判断し、否応なしに引き受けて、いつも相談相手になっている大塚巧芸社の大塚稔を呼び寄せて相談すると、大塚は仕事上おつきあいしている先生方のなかに「私が心から頭の下る、人格学識ともに立派な先生」で、しかも「利権屋の巢窟になって居る東京美術学校に、大改革の斧を振うことの出来る実行力のある学者」は大阪市立美術館長の上野直昭であると言う。そのため大観は上野を推すことにし、紫水を介してその旨文相に答申し、文部省は上野と交渉して内諾を得、「文部省、上野氏、それに介添役の大観が一枚加って、直ちに鳩首凝議を重ね、その結果は、現在の各科の主任教授は全部勇退して貰い、新しい人材をもって充当する、という根本方針を決定した。」というのである。

しかし、紫水が文部大臣と大観の連絡役をつとめたことはあり得るとしても、大観が紫水によって初めて改革計画を知らされたとは考えられない。なぜなら、文部省の決定の背後には細川なり児島なりが居た筈であり、彼らが前もって大観に知らせなかったとは思えないからである。また、いかに相談相手とはいえ、大塚稔一人の意見に従って大観が上野を推薦したなどというのも疑問である。上野を推すことは既に決定しており、それは大観も承知していた筈で、この文相、紫水、大観の間の動きは日本美術報国会会長である大観の推薦を得るという、いわば儀式であったのではなからうか。

改革

文部省の準備が整うや、十九年五月二十日に校長澤田源一の辞任

と専門教育局長永井浩の本校校長事務取扱就任の発令がなされた。改革計画についてはまだ伏せられていたとみえ、新聞各紙はこれを「澤田東京美術学校長は今回東亜同文会に新設された教育部初代部長に就任のため退官した」と報じただけであった。発令の当日、永井は本校全教官に対して「不肖校長事務取扱ヲ拜命シタルニ就テハ緊急貴意ヲ得度事項有之ニ付」として、長老教官たちには五月二十四日（水曜日）の午前十時に、その他の教授助教授たちには同日零時三十分に集まるよう通知を出した。通知の原稿（大日本帝国用箋にペン書き）が残っており、これには召集すべき教官四十四名の名列記されていて、留任予定の教官には○印が付されており、臧首予定者のうち結城素明と小林万吾の名の下には「（本田）」と、また、六角紫水の名の下には「（局長）」と鉛筆で記されている。本田は前出の本田弘人、局長は永井浩である。結城、小林、六角三教授に対しては通知に際して本田と永井が特別に接触を行なったことが推察される。

五月二十四日、永井は参集した教官たちに対して全員の辞表提出を求めた。山崎寛太郎の話（前出）によれば、このとき永井は就任の挨拶をした後、文部省では改革の意志があるから一応全員辞表を出して貰いたいと言ひ、具体的なことはなにも説明せず、教授、助教授、助手に至るまで全員を個別に呼び、永井と佐藤得二の前で白紙に捺印しただけの辞表を提出させたという。多くの教官にとって、これは寝耳に水のことであり、内心の動揺は大きかったに違いないが、何の波瀾もなく永井の指示どおりに皆辞表を提出した。いかに非常時下の異常な状況下にあったとはいえ、文部省側が余程巧妙に

事を運んだのでなければ、このような成功はむずかしかったろう。総辞職のニュースは新聞各紙に取り上げられた。左記は翌二十五日の『朝日新聞』の記事である。

美校の全教授が辞表を提出

改革へ踏出す第一歩

東京美術學校の改革はさきに和田英作氏校長のころから度々唱へられてゐたがほとんど實を結ばず、たゞ支那事變、大東亞戰へと移行するにつれて、同校生徒も勤務に訓練に關ふ學徒の一翼になつてはゐたが同校の教授は他の専門校とは趣きを異にし老齡の人もあり、美術家として重きをなす人も多く従つて擔任時間にのみ登校、授業が終れば直ちに下校するといふ傾向の人が多いため、教授、生徒一体となつて訓練に勤務にと行を共にする教育態勢に免れずれば反する風にも見受けられた、従つて文部當局では折あれば同校内容を改革し關ふ學校への完全な姿に切り替へることを決意、まづ去る廿一日澤田源一校長に代つて永井専門教育局長が校長代理として登場、廿四日には全教授を午前、午後に分けて招集、従來のごとく擔任の時間のみ學校へ出て教授するやうでは現下の教育大方針に反するが故に根本的に改革する意味のことを述べ、その改革斷行を圓滑にするため全教授、助教授の辭表提出方を求めた結果、結城素明、朝倉文夫、六角紫水、北村西望、津田信夫、田辺至、高村豊周、森田龜ノ助、矢澤弦月、伊原守三郎氏、その他全教授は即日辭表を提出した

かくて同校の改革はまづ第一歩をふみ出したが、永井校長はこ

れら辭表提出の教授のうちから殘留を求める者の外新たに求める教授として院展、國畫展、一水會系の作家に白羽の矢をたてる模様である

また、同紙は二十六日の社説にもこれを取り上げて次のように論じている。

美術學府の改革

從來學校行政上最も困難とされてゐた東京美術學校改革が文部省の大英断によつて、その第一歩を踏み出された。明治廿年勅令を以て設置されて以來、同校は明治卅一年の岡倉天心校長ならびに多數の教授、助教授の辭職騒動は別とし、官展の隆盛と併行し唯一の官立美術學校として、概して平穩な年月を送るうち、教授中には一種自ら他の干渉を許さざるの力を持つに至つたのである。昭和七年和田英作校長により教授の更迭等が企てられたこともあるが、一部教授とその背後にある力によつて防げられ、爾來、歴代校長はたゞ當らず觸らずの態度を執らざるを得なかつた。然るに今回永井専門教育局長が同校校長事務取扱ひとして登場、根本的改革を宣言して、全教授、助教授の辭表提出方を求め、まづ成功したことは誠に特筆すべき事件といわねばならぬ。苛烈凄絶な決戰段階に當面して國家が學徒に期待すること非常に大なる時、藝能方面を擔當する美術學校、音樂學校のみが、教育の決戰体制の埒外に置かれてよい訳はありえない。もちろん、特殊の事情にあるこれら藝能的學校は、専門的技術の修練のため

に、特殊な教授方法を必要とするが、ただ技術のみを偏重して師弟同行をなし得ざる旧態依然の教育方法をとることは許されるべきでなく、今回の當局の英断もこの点を是正するにあつたときへ傳へられてゐる。

今や多くの美術家が戦線に工場に挺身、またそれらの職域によつてこの大戦争完遂に協力し、多大の効果をあげてゐる實情にてらして見ても、美校教育といへども人を得れば、師弟同行して行學一体の擧に出ることも、また次代のわが美術界を擔當すべき氣魄と、技術とをかねそなへる若人を指導することも不可能ではない。

文部當局が敢てこの英断に出でたことには十分なる成算あつてのことと思ふが、希くは同校の特殊性を生かし、學徒の訓育、指導に十分の責任を持ち得る尊敬と信頼に値する人物を選び、初志を貫徹せんことを期待するものである。

この論説は、改革を「闘ふ学校への完全な姿に切り替へる」ための措置であるとして一面的なとらえ方をし、背景にある美術界の問題などは一顧だにせず、また、文部省の措置の正当性を強調するものであるが、同じ紙面を「洛陽陥つ」「伝統輝く日本海軍」「敵新攻勢を開始」「欧洲爆撃激化す」等々の戦争記事が埋め尽くしてゐるのを見れば、社説に取り上げただけでもよしとしなければならぬだらう。

一方、二十六日の『読売新聞』は次のように報じている。

教授に在野實力派

戦ふ美校・陣容を一新

美術も總力戦における一部門としてすすむとき、美術界の傳統的學府、上野の東京美術學校にひとしほ濃き決戦の色調がもとめられ、近く文部當局の手で大改革が行はれる。

まづその第一歩として去る廿一日澤田源一校長に代つて永井専門教育局長が校長代理として就任、ついで根本的改革の建前から一應全教授、助教の辭表提出方を求め、白紙にかへつて現下の教育大方針にふさはしい人選を行ふことになり、新教授の大部分は國畫展、一水會系の一流作家を招く方針とみられ、廿四日午後一時から一ツ橋學士會館で文部當局と在野大家十數名との間に懇談が行はれた。

この結果校長並に主任教授として内交渉を進められてゐるのは校長として大阪美術館長上野直昭氏、主任教授として洋畫梅原龍三郎、安井曾太郎、日本畫小林古徑、安田靫彦、圖案富本憲吉、彫刻平櫛田中

の諸氏、これらの人々の出馬決定の暁は從來帝展並に院展派で占められてゐた美校中樞部がいはゆる「在野黨」の實力派にうつり、遠く明治の初めからの上野の杜の傳統もこゝに百八十度の轉回することになるわけだ

永井局長談「いまなにもいへない、決戦下の美校のあり方として改革は當然行はれるべきだ」

こちらは『朝日新聞』と違い、改革を美術界の問題とも関連づけ

てとらえようとする姿勢を示している。尤も「新教授の大部分は国画展、一水会系の」とあるのは「新教授の大部分は院展、国画展、一水会系の」と直すべきであり「従来帝展並に院展派で占められてゐた美校中樞部」は「従来帝展並に新文展派で」云々とすべきであつて、伝統ある読売美術記事もこの時期にはかくも粗忽になつたかという感を免れない。また、「廿四日午後一時から一ツ橋学士会館で」云々とあるが、この日は前述のように永井が全教官を召集して辞表を提出させた日である。在野大家との懇談がそれと並行して行われたとは考えにくい。このような懇談があつたという記録は現存しないが、仮りにあつたとしても二十四日ではなかつただろう。

辞職勧告の翌々日、永井と佐藤は新任、辞任の主たる教官の発令を文部大臣に要請した。左記はその上申控えである。

昭和十九年五月二十六日起案〔発送五月二十九日。起案者印山下〕

専門教育局長 印〔永井〕 教学官 印〔佐藤〕

上申案 年 月 日 東京美術学校事務取扱

文部省専門教育局長

文部大臣宛

上申

左記ノ通御発令方御取計相成度此段及上申候也

記

六・一発令

平櫛 俣太郎

六・五発令（富本のみ）

小林 茂
安田 新三郎
富本 憲吉
安井 曾太郎
梅原 龍三郎
石井 鶴三

任東京美術学校教授
叙高等官三等

〔前文右に同じ〕

記

東京美術学校教授

結城 貞松
森井 健介
多賀谷 健吉
六角 注多良
小林 万吾
朝倉 文夫
北村 西望
和田 三造

依願免本官

東京美術学校教授

兼工芸技術講習所教授

津田 信夫

依願免本官並兼官

次いで五月三十一日には永井が学士院で平櫛ら新任予定者と何事

かの相談会を開いたことが通知電報案によってわかる。

以上主要教官の任免手続きが済んだあと、六月一日に上野直昭に對して本校校長兼工芸技術講習所長の発令がなされ、また、上記教官の任免発令も同時に行なわれた。永井はこれ以後は全く手を引き、残る教官の任免は上野校長に委ねられたが、佐藤得二は六月五日付けで本校教授兼任を命ぜられて、しばらくの間校長を手助けすることになった。

上野校長は六、七月にかけて本校および工芸技術講習所の大方の教授、助教授の更迭を行なったが（職員動静の項および別巻『上野直昭日記』参照）、講師に對しても次のような通告を以て辞任を求め、代わりに新たな人材を次々と起用していった。

〔昭和十九年七月十四日発送書翰案〕

拜啓 時下益々御清祥の段奉賀候 陳者本校は現下の時局に即應すべく各般の事項に互り刷新改革を圖り居り候ことは既に御承知のこと、存上候處本校教育のため程々御盡瘁被下候先生に對し誠に申上兼ねる儀に御座候がこの際御勇退相願ふこと、致度候間御諒承被下度此段得貴意候 敬具

年 月 日 本校 校長

小磯 良平
沼田 勇次郎
上村 福幸
高階 順治

宛

改革後の教官の顔ぶれを見れば、在野の実力作家が官展系作家に對して替ったというだけでなく、日本美術院ないし横山大觀と關係の深い人々が多く起用されたという印象は拭いがたい。『東京新聞』（十九年六月二日）などは「大觀の改革案実を結ぶ」という見出しで報じている。事実、大觀は前述のように人選に關係しており、特に院展の有力作家が從順に招聘に応じたことは大觀の指示なくしては考えられないことである。佐藤得二は改革が一般に与えた印象について、次のように弁明し、その正当性を主張した。

最前線 美校改造と日本教育

佐藤 得二

過般行はれた東京美術學校の改造は、實技主腦部の更迭に始まつた。六月二日朝の新聞に、安田靉彦・小林吉徑（日本畫）、安井曾太郎（油畫）、平櫛田中・石井鶴三（彫刻）、同六日の新聞に富本憲吉の諸氏が新任教授として報道されるや、識者の多くは此の顔觸れの中に美術學校出身者の少いこと、また帝展（文展）と對立し來つて美術界二分の觀を呈した院展派の多いことに興味を惹かれ、その底にある嚴肅なる事實を看過する傾きがあつた。

即ち問題の焦點を『官展の本城』が文部省自らの手によつて『在野の實力派』に占據されたといふ形に設定して、その経緯を推測したり意義を論じたり、甚しきに至つては文部省が昔の政黨内閣の入れかかはる筆法を以て美術學校に臨んだと云はん許りの論調も見受けられた。現在進行しつゝある教育刷新の業務の一端に與かる者としても、上野新校長の清潔な心事の一端を知る者とし

ても、これは甚だ遺憾な一事である。故に筆を執る。

筆者は美術にも美術界にも全くの門外漢であつて、新任諸教授の氏名はともかく略歴の如きは新聞で始めて承知した程度であるが、問題の院展派の人々が歐風化する美術學校を去つた岡倉天心が明治三十年かに創設した日本美術院に育まれたこと、及び昔風の言はば徒弟的修業で今日の大を成したことを想ひ、甚だ愉快であつた。

明治初期の烈しい歐化時代に歐洲諸國の美術を調査して歸つた天心居士が、その巡歴によつて東洋の美術に對する傾倒の情を一層盛んにし、遂に『アジアは一なり』の見識に達したことは、最近數年來改めて高く評價される事實であるが、此の人の播いた種が昭和の聖代しかも大東亞戰爭の眞最中に其の所を得た事は天心にとつては蓋し快心の極であらう。況やその遺愛の弟子達が老來尙ほ青年の純情を以て、天心先生の追憶を語りなつかしむに於てをやである。之を綜合して一の國家的美談となし得ようと筆者は信ずる。而も此の美談が何等の作爲なく、たゞ斯界第一流の人士を集めようとの上野直昭校長の純粹な努力によつて、期せずして顯はれたのだから愉快である。

今日の教育刷新の方向は、身心一如とか學行一致とか云へば物々しいが要するに教育の原理が生活を貫くことである。師弟同行と言ふのは師弟の親密さである。陣頭指揮と云ふのは師が高邁なる抱負を掲げ之に精進する事である。この點で昔の家塾的徒弟的修業が近來の學校の斷片的教育に優ると云ふのが、昭和の時代人の反省である。然るに新任諸教授の人となりと苦闘の歴史は之に

對して貴重な例を提供してくれた。日本美術の健在は同時に日本教育の健在の證である。私は世人が斯る面に注目して、現在のみならず將來の教育を論じて貰ひたいと思ふ者である（東京美術學校教授）

〔現代〕第二十五卷七号。昭和十九年七月）

⑬ 上野直昭校長

校長に選ばれた上野直昭は、明治十五年十一月十一日兵庫県に生まれ、東京正則中学校、第一高等学校を経て明治四十一年東京帝国大学文科大学哲学科（心理学専攻）を卒業。同四十四年から大正十年まで美学研究室の副手をつとめ、その間、教授大塚保治、講師中川忠順の薫陶を受けて美学・美術史学者としての基礎を作つた。大正九年四月以降、東京女子大学講師をつとめ、同十三年十月には京城帝国大学予科講師となつたが、同月、美学・美術史研究のため滿二年間ドイツ、イタリヤ、ギリシャ、アメリカ合衆国在留を命ぜられ、翌十一月出發。昭和二年三月帰国し、京城帝大教授（大正十五年四月任命）として美学美術史第一講座を担当し、同十六年一月まで在職した。その間、五年二月から六年七月まで交換教授としてドイツに赴き、ベルリン大学で日本美術史を講じ、七年五月から十年四月までは九州帝国大学教授を兼任して法文学部美学美術史講座を担当。十年五月から十二年八月までは京城帝大法文学部長をつとめ、十五年十二月国宝保存会委員となつた。十六年二月大阪市立美術館長に就任、十九年五月本校校長に就任する直前まで在任した。

直昭は本校創立と深い関係のあつた九鬼隆一の甥にあたり、東大